
ラドゥのメモ帳

ラドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラドウのメモ帳

【Nコード】

N2292BA

【作者名】

ラドウ

【あらすじ】

これは書く暇がないけど思いついた小説のネタをお試し版として書きつづったメモ帳みたいなものです。

ここに書いてある話はいずれ書くかもしれませんが、書かないかもしれないのであしからず…。

遊戯王5D's伝 似非関西人の決闘人生 (1) (前書き)

とりあえず、5d'sです。お試しとして書いてみました。

遊戯王5D's伝 似非関西人の決闘人生 (1)

俺の名前は難波ヨシツネ《なんばよしつね》。ぴっちっぴっちの3
6歳や (すでに中年)

今俺はちよつとしたメダパニ状態(混乱状態)に陥っとる。なぜか
つて?それはな…。

いつのまにか赤ん坊になつてたんや…

……OK、とりあえずその受話器を下ろそか。別に頭がおかしくな
ったわけやないから

プロローグ『転生ってなんやねん…』お試し版

「ばぶばぶぶー（落ち着け俺。クールになるんやクールに…）」

とりあえず、あまりに突飛な事態に俺は冷静になろうと努める

（ま、まずはこうなった原因を探らな。なにか、なにかあるはずや…）

俺はこうなった原因を探ろうとめったに使わない頭をフル回転（笑）させてみる

.....

.....

.....

.....

覚えてねえ——————!!?!?

え?なにこれ。マジでなんの記憶もないんやけど!?

と、とりあえず覚えてることを整理しよか

・名前は難波ヨシツネ

うん、これは覚えとる。

・年齢は36歳でカードゲーム(遊戯王OCG)と二次創作の小説を読むが好きな会社員。ちなみにドーター

ほっとけ。

・他の記憶がない

「ばぶば——————!!!(?)」

なんで?なんで自分がサクラランボなこと覚えてんのにその他の記憶がないんや——————!!!?

(それはわしが消したからのう。)

・・・ん？

「ばぶばぶばー。ばぶばぶば？(今誰かの声が。気のせいかな?)」

俺は幻聴だと思ってきく(幻聴じゃないんじゃないかな?)
んや？一体誰や!?

俺は突然聞こえてきた爺言葉の人物の声に、警戒する。

(ふおふおふお、まあこのままではお主も話しづらからう。自己紹介の前に姿を見せるとするかの。)

「ば？(は?)」

ピッカーーーーン!!!

突然目の前が光に包まれた…。

「ん…んん？」

俺が目を開けると、そこは白い色に塗りつぶされたような空間だった

「どこや…」

およ？さっきと違って喋れるぞ？

自分の体を確認してみる

「元に戻つとる…」

先程まで赤ん坊だった体は元に戻つとった

「ふおおおおお、良く来たの坊主…」

「ん？この声は？」

俺は立ちあがった辺りを見回すが誰も見当たらない

「おかしいなあ…」

さっきの声は先程聞こえた老人の声だろう

しかしその老人はどこにもいない

いったいどこいったんや

俺は試しに呼びかけてみた

「おい、誰かいなんかー！ー！」

「どこじゃぞー！ー！」

おっ！声が聞こえた

急いで辺りを見回す。しかし…

「やっぱり、見当たらんなあ？」

その声の主はやっぱり見つからへん

ほんまにどこにおるんやろ？

俺はまた呼びかけようとして息を思いっきり吸い込み、

「どこにおるっていいておるじゃろつが――――！！

！」

「ぐばあああああああああ――――！！

！」

思いっきり鳩尾にタツクルをくらった

な、なんやねんいったい…

俺があまりの衝撃に腹を抱えて悶絶していると、頭の上から声が聞こえる

「ふん！わしを無視するから悪いのじゃ！当然の報いと心得よ。」

…なんか偉そうな声が聞こえてきた

俺が苦痛に顔を歪めながらそちらを見ると、そこには…

褐色の少女がいた…

……なんでやねん。

俺はそこで意識を落とした。

意識を失った俺が再び目を覚ますと、そこには俺の顔を心配そうな顔で見ている先程の幼女の姿が

ああ・・・

「やっぱり幼女や。」

「だれが幼女じゃーーーーー!!!!!!」

俺の言葉を幼女が全力で否定する。というか耳元で叫ぶなや。マジ耳キンキンするわ!!

で、

「お譲ちゃん誰や?」

「わしはお譲ちゃんじゃないわ!神様じゃ!!!」

「そうか、神様か。すごいな!神様(笑)」

「神様(笑)っていういうなーーーーー!!!」

それから、どうみても幼女だの、幼女じゃないだから神様だっついてんだろだの、だったら証拠みせてみるだの、だったらお前の恥ずかしい過去をばらすだの、記憶がないから確認できないだの、ドテー(笑)だのそんなやりとりがあり、俺はこの幼女が神様だということ信じぜらるおえなくなつた。

…ドテーのなにが悪いんや………

「で、その神様(笑)がなんのようや?」

「意地でも(笑)はとらないのじゃな」

うん、そこらへんはあきらめて

それに神様（笑）は疲れたような顔をし、「もういいわ」と話しを進めることにしたようや。すまんな？

「ふむ、ではまず自己紹介じゃな。わしの名前はテ・オドローという。一応神様をしておるよ。…あ、念のためにいっておくがテオドラという名前ではないからの！」

「？テオドラって誰よ」

「いや、わしも知らんがなんかいわなければならぬ気がするの…。
なんでじゃろ？」

いや、俺は知らんよ

「呼びにくいから『ドロー』でええか？」

「もうなんでもいいぞい…」

なんでそんなに疲れとん？（君のせいじゃない？b y作者）

閑話休題

「で、その神様がなんのようなんや。」

「いや、お主は自分が赤ん坊になってた理由が知りたかつたんじゃ

なかったのかの？」

「…おお！そうやった、忘れっとなっ！」

「…ふう、まったく…。」

そない、呆れた顔しなくてもええやん。…照れるやろ（笑）

「それでじゃ、なんで赤ん坊になったのかというと、実はお主、

転生したんじゃないよ…。」

転生か…。

「ふうん…。」

「ふうん…って、…それだけかの？」

いや、だって

「赤ん坊になるなんて事態になんのはそれくらいやる?」

二次創作を読むのが趣味らしかったからな。その辺の知識はのこつとるわ。…なんでこんな知識がのこつとるんや。

「あ、それわしがやった。」

「なんでやねん。」

なんでそないなことを?

「前世の記憶を全て持ったままだと、未練を残して人生を楽しめない転生者もいたからの?余計な情報を忘れさすようにしたのじゃ。」

ドーターは必要な情報だったと申すか。

「それはおもしろかったからいれてみたww」

「てめえッ……!!」

初めてこの幼女に殺意が沸いた。

でもまあその程度のことでも腹を立ててもしゃーない。事情は理解した。

あ、そうだ。まだ聞かなきゃならんことがあったなあ。

「なあ、まだ聞かなきゃならんことがあったんやけど?」

「ん？なんじゃ。」

首を傾げる幼女神。ツク！なんて破壊力や！？

気持ちを落ち着かせるために俺は深呼吸を一つすると、ドーラに尋ねた。

「結局俺はどんな世界に転生したんや？」

するとドーラは左手の手のひらを右手でぼんと打つ。どつやら忘れてたようやな。…どーでもえーけど古ないかそのリアクション。

「そっじゃな、忘れとったわ。お主が転生する世界は、

「遊戯王5D'sの世界じゃ。」

これは転生者である俺と、シグナーたちの戦いを綴った物語である。

プロローグ『転生ってなんやねん…』お試し版 終わり

遊戯王5D's伝 似非関西人の決闘人生 (1) (後書き)

神様の名前があれなのは、褐色幼女がテオドラしか思い浮かばなかったためあの名前にしました。他意はないです。

レドウの書く恋姫無双プロローグお試し版(1)(前書き)

短編の恋姫を書き直してみた。

ラドウの書く恋姫無双プロローグお試し版（1）

皆さん、寒さが激しさを増してきた今日このごろ、どっど日々をお過ごしだろうか？

この作品の主人公である彼は、自らの部屋で布団にくるまりながら、お気に入りの本を読んでいた。

お試し版プロローグ『転生者、誕生す！』

「ぶつ…。」

俺は自らが読んでいたライトノベル、『火の国風の国物語』を閉じると、ぼふんとベットに仰向きになった。

「やっぱかつこいいなあー、アレスは。」

『火の国風の国物語』。

それは富士見ファンタジア文庫から出版された師走トオルが作者のライトノベルで、するいわゆる「剣と魔法のファンタジー」の世界を下地にした架空の戦記で、架空の大陸「グリア大陸」の南西に位置するベールセル王国を主な舞台とし、王国軍と王国に反旗を翻した反乱軍との戦いを描く。生まれ持った剣の腕と精霊から与えられた力により一騎当千の実力を持つ王国軍の騎士アレスと、優れた智略を駆使する反乱軍の指導者ジェレイドの、対照的な特徴を持つ2人の主人公の視点で物語が進行するファンタジー戦記である。

どうやらこの少年、三日月信也みかひつしやはこの物語の主人公、アレス・ファノヴァールに憧れているようだ。

アレス・ファノヴァール

ファノヴァール伯爵家の4代目の当主であり、王国軍の近衛騎士。

18歳。近衛騎士の証である赤い甲冑と、貴族にのみ着用を許された赤いマントを身に付け、右手でファノヴァール家に代々伝わる剣

を、左手でクラウディア王女から授けられた剣を振るう。並外れた剣の才能を持ち、それに加えて精霊パンドラとの契約により人間離れした凄まじい身体能力を有する。その力は一騎当千と呼ぶに相応しく、敵陣営からは「赤の悪魔憑き」と呼ばれ恐れられている。(ウィキペディア参照)

この主人公は、まさに王国への忠義一筋の人物で、初めは盲信的に王国の正義を信じ、騎士道を貫いていたが、王国で怒った反乱と共に様々な人物に出会い、話をし、剣を交え、一時は奴隷にまで身を落とし、最後には宿敵たるフィリップを打倒するそのさまは、まさに王道の主人公にふさわしい人物である。

まあ、男なら憧れても仕方ないだろう。そんな人物である。

信也は時計を見る。

時計の針はすでに深夜の二時を指していた。彼はいまだに高校生の身。早く寝ないと明日遅刻してしまう。

「やっべ、早く寝ないと。」

そうして信也は部屋の明かりを落として、目を閉じた。

「すみませんでした――――！！！」

「・・・・・・・・・・。」

目を開けたら、女の人が目のまで土下座していた。なんぞ？これは。

「とりあえず事情説明…おk？」

「お、おk。」

案外ノリのいい人だった。

かくかくしかじか

話を聞いた結果、どうやら俺はこの目の前の女性、『女神さま』に殺されてしまったらしい。

本来なら死ぬ予定ではなかったのだが、彼女がミスをしてしまって、俺の寿命が一気に0になってしまったらしい。

「ちなみにどんなミスしたの？」

「えつと、書類を」

「ああ、はいはい。書類をコピーかなんかで、間違えて犬の餌にあげちゃって。」斬新なミスだなあ、おい!？」

「ひっ!？すいません、すいません、すいません。」

俺が突っ込むと目の前の女神さまとやらは壊れたおもちゃのように

謝りでした。

いや、そこまで謝らなくても…。

若干引いてしまったが、いつまでもそのままではいけないので、女神に話しかける。

「もう、もういいから頭をあげてくれ！」

「ふ、ふえ？許してくれるんですか？」

女神が涙目のまま首を傾げてこちらを見る。

「か、かわええ…。」

「ふえ？」

「い、いやなんでもない／＼。」

あ、あぶねえ。涙目の女神がかわいくてつい本音がでちゃった…。

と、とりあえず話を進めないとな…。

「で、俺はこれからどうなるんだ？ただ成仏させるならお前さんの目の前に呼ぶ必要はないよな？」

俺がそういうと、女神は涙をゴシゴシとぬぐい、その翡翠のような瞳をこちらにむけるとしつかりとした口調で告げた。

「あなたには別の世界へ転生をしてもらいます。」

……テンプレですね。わかります。

「一応聞くけど…なんで？」

「人間は輪廻転生を繰り返すということを知った覚えは？」

「ああ…昔聞いたことあんなそういえば。」

「世界には輪廻の環というものがありまして、本来人の魂はその環に乗って輪廻転生を繰り返すのですが、あなたの死は完全なイレギュラーなため、その環から外れてしまったのです。」

おう、これはまた聞いたことある設定だな。でもその設定でいくと俺もこの人がミスしなきゃまた違うものに転生してたんだよね？普通に死んだら俺っていったいどんな人間に転生してたんだろうか。

「ちなみにあなたは普通に死んだら来世は団子虫になる予定でした。」

「哺乳類ですらないともうすか。」

そりゃないぜ。…ああでもものんびりできてそれもそれで（おい）

「でも、あなたの場合我々のミスで死んでしまったので、人間での転生となります。」

両手を前にやりぐつと握りこぶしをつくるそのさまはかわいらしいものがあるが、それは当り前だからな？もしミスで死んだのに団子虫転生とかだったら、暴れてやるからな。

あ、でも違う世界に転生ってことは、あの世界『火の国風の国物語』の世界にもいけるってことか！？

「ちなみにあなたのいってもらう世界は『真・恋姫十無双』の世界です。」

「いきなり夢崩すとかあんた鬼か！？」

「ふ、ふえ！？す、すみません！ー！！？！？」

閑話休題

「で、なんで恋姫？」

たしか三国志の英雄たちが全員女になってるエロゲーだったよなたしか？二次創作とかではよく読んだけど、俺エロゲーとかやんない

から正しくは原作知らないけど。

「えっと、実はあなたにその世界でやってもらいたいことがあって…。」

…ほづ？

「そちらのミスで死なせたくせにさらに仕事をしると？」

「ははは、すみません。でもこれは決定事項だって上司が…。」

神にも上司っていたのか…。世知辛いねえ。

まあ、ここまで来たらしょうがないか…。下手に断って魂消滅とかやだし。

「おk。了解した。でもさすがに生き残るための能力ぐらくれな
いか？」

こちらら平和大国日本の生まれだしな。

「それはもちろんです。なにがいいですか？ゲートオブバビロン？
無限の剣製？」

いや、さすがにそこまではいらねえよ…。

思い浮かぶのは俺の憧れ。『赤の悪魔憑き』と恐れられた騎士の姿。

「俺が欲しいのはな…」

そうして俺は転生した。憧れた男の力を伴って…

ここは漢王朝の都、洛陽にある袁家の屋敷。

袁家とは後漢時代4代に渡って三公を輩出したこの時代きつての名家であり、この外史ものがたりの主演となるある男は、この屋敷で産声を上げ

た。

おぎゃあ！おぎゃあ！おぎゃあ！

「奥様おめでとございます。立派な男の子ですよ！」

その赤子を取り上げた乳母は、その赤子の母親であるこの屋敷の主である妙齡の女性、『袁成』^{えんせい}に取り上げた赤子を見せる。

出産を終えたばかりで疲労の色が浮き出ている彼女は、しかし自らがお腹を痛めて産んだその子供を見ると、その顔一面に笑みを浮かべた。

「ふふふ、いい目をしているな。」

見れば先程まで泣いていたその赤子はすでに泣きやんでおり、袁成の顔を観察するかのようにジッと見ていた。

袁成は赤子を乳母から受け取ると、その腕の中に抱きいれる。

その緑色の瞳に袁成は天賦の才がある物特有の理知的な輝きを見た。

そして彼女は確信する。「この子は確実に歴史に名を残す存在になる」と…。

「ま！奥様！」

ハッと乳母の声で袁成は我に返る。どうやら先程から呼ばれていたらしい。

「大丈夫ですか奥様？少しぼうつとしていたようですが……。」

「す、すまぬ。少し考えことをな？」

「はあ……。」

「そ、それでどうしたのだ？」

「え、ええ。ぼっちゃまのお名前はどつするのをお聞きしたいのですが？」

「おお、それならもう考えてある。」

袁成は自らの腕の中にいる我が子の顔を覗き込む。

「お前の名前は伯^{はく}。袁伯李真^{えんはくりしん}。そして真名は『信也』だ。これからよろしく頼むぞ？」

袁成がほほ笑むと緑色の瞳のその子供、袁伯は「ダー！」と片手を袁成にむかって突き出す。

まるで、「まかせろ！」とでもいうように……。

その様子を見て、袁成はその笑みを深くするのであった。

これが後に『赤の悪魔憑き』と恐れられるようになる武人。『袁伯^{えんはく}』

李真^{りしん}の誕生であった。

そしてそんな赤ん坊は、

(よりもよって袁家とか、なんでさ…)

テンション駄々下がりだった…。

お試し版プロローグ『転生者、誕生す!』終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2292ba/>

ラドゥのメモ帳

2012年1月6日00時49分発行